英對家語四編

中

特
へ遠13
840
11

門へ遠13
號840
卷11

春色英對暖語 巻之十一

梅暮里谷峨拾遺別傳

江戸

爲永春水著

明治三六年十月十八日購求

第二十一章

扨も有ふ白きてぞ人よ嘉らまし〜今八夜ぶかの花をのこりぞ
きくと称て田舎の公を和らげ再度賜ふ〜貞女の
吉ぶおり〜ふを例ふも引大和物語の鑑ふり文武氣候
愼こて男性ちたぶ自然和て浮氣も止ものう愛ふ故ハ
ちあたぶ鄭ふ有て情人ふ〜父母ふ大ふ孝公〜家ふ

婦人を母上養ふんなふ家次第の世話をうけて母をあづけ
あんど
安堵せーづりもづるのるも難別て居るやくとくごきう男孫ら
えん
仏の道理ふきさいきとう今八隅てーのの男ひかぶるく母人
きまを
乳休みを言うて乗ごも便りを寄ごて神ごのこ参くく信ぜる
妙見宮人祈願くふ参詣ーー今霜も同じ時刻ゆえう
ゆが
帰ることを上て三帰る時の真中家次第ふひしを行合顔
見あらせ　婦ヨヤ御ごうとのうとーきーく家人　婦見さまへ
まる
乗ごうとのうト唯仏乳ゆーー言ゆて行ごうんとする神成

婦人　婦アレマア良ちうとあ安ゆきうて行下きーー仏幸
あ頼ひでどざるきて行ごうトのうまてさもが接切つて別ごく
祝の科もゆーーき薄やきーーき家次第ゆまば立止ものの
祈ごうくふ　家ーーうんで用が有ゆ今ーーば急ごうう明日でも
ゆこへ行ふュ　婦ーー左様でもどざるきせうが又行る入て行下
ゆひと私ごうやうる母人が御案じ中て夜もろくく別きせん
ものヲ仏幸あ長でも仕ふでお目ふくくが私の僥倖当
ゆの出不賞とあがーーやーてマアお参成て行下きーート

言ひつゝ眼うゑ涙をうかべ
さらうて別れもあへず立て　宗「サテ丈夫ぶ同伴ふ
彼のト並んで歩行哀の感　他所目ふ見ひお婆のすがた
姫御前ふ[illegible]ト[illegible]ふ[illegible]ど[illegible]米ハそこる俄にも思ひの
外の[illegible]の男ハ[illegible]おとる哀の情隔て[illegible]ようる遠ざかり言
葉とけ[illegible]氣の毒ちつよ[illegible]お婆の家のうち変居も
高く[illegible]親の形ハ[illegible]宗次郎　宗「毎日アハ[illegible]沙汰せ仕
まつるとト美人通ればお婆の母　母「[illegible]昨日那アハ[illegible]

たゞ宮ふモウ　於婆と両人で毎日お婆ぶうヤて居アて
まつるそれ[illegible]お婆が我儘者でどうもまことに多茂[illegible]の
お氣ふ障ることが有て山所へお出[illegible]ふ成ものゝ[illegible]と私が眼
ふ此言をヤて子トのものゝ[illegible]ふ成で出〳〵火鉢をそゝる人
一ア引ヤ〳〵よく〳〵アそれでも今夜お出成て[illegible]
エお婆や[illegible]お婆ハ[illegible]行でお目ふ
の形でお目ふうつて[illegible]ふ連まヤ〳〵シゴアトのひもの
[illegible]持〳〵勝敗を[illegible]祖師さまの形ハ[illegible]火鉢の陰人[illegible]

場へ見物衆も茶屋の内用ゐござるませうけまども今夜八伯
孝山中へかくをかをかくろて法下さりを糧〳〵おくるゝ十
度支がおやまりたうう　宗「左様う実八急ゐ用もあつけれ
ども遁迯い支ごうう今夜八宅ゐ居様ヨ毋仙お世話
でも横町の麺でも左様のつて長ゐ　増「ヲヤ私やア今晩
家へ帰を就へまゝ家「十二能八ゐ両方あつても邪ア
わハゐうゐねへトわへ第場八宗次郎の麺をぢうと見る是
ハたゝうふ柳川のうを閑て居る玉糸さ與と柳川のう

ゐ引當て両方とつゝぶ耳に当ゐて男の麺を視ると言べゝ
きてこまつう酒肴も来て久〳〵ぶやうる酒のやふゐ時刻
もうる其中ゑ此ゐ糸ゐせうゑ度を彼是と毋八
宗次郎ゑ言のゞせど場八一言も恨ゑ我のいぶよゑ行よ
今ゐて宗次郎の如を和〳〵げる様よおろやゝして居る今夜
夜遁〳〵ゐうぶを尽してつゐひうきをするう只情金て
引戻をうの胸を長用をするを男ゑ是ゑ墓をげゐゐ是
数を舎ゐ子の刻酒ゑゐ終ゐ即戸に入けるゞ毋も

二階にて寝まるまでも世話も寝と申しまして家内の
機嫌を窺ひまるる場合の子
家「なんぢ」場「ナニヤキ」
いつまでも万一お茶さんが腹をおこされる
ませんものヲ家「ナニ」
面倒なものヲ何でも腹を立ちて左様いつて
関せぬ場「左様なれば言葉ばかり氣の障て
お下さいまし家「ナニ氣の當ハ仕方ない久しく不来よ

居る中情人が出来て主人の世話ふなり成とる主人の女
房ふなり成とるの不義ばかり無ぐ左様言ても
此身と離別て主人仕方なくの事ハ
の通ふ仕て居らるが此様なる物を居るのを止て是ら
とりなば成して出来れば場「ア」其様な空だろうトいはハ
いとどなるハ嫌しき限をあるばとて
深く申までも此分どよろう考へ家一不安式いとねば減も
不届を思案して場「ナニ戯言ても情人の哀のとりなる

あも仕ハしませんヨ初して半年過て此所へおゐでなさる
夫中も一日の為も不自由の為に抱えしてお暮なすこと
内儀をおろそかふ男川て十三年
物ゞ一倍の脳でどざるまゝ人家そやア左様ざらへゞ
此月が勝るで不束ふ居るさうをいろて女房や姉和嬢せゞ
言まるものう 塔ヱヤ女房とな人 家この可愛女房のヨ
ト お塔の笑ひの所を横てちものと仕ゝ 塔ヱホヽヽヽ
空おろうろう お内義さんまた 柳川さんとゞお成のごろら

所在 私ゞまんと男川てもゞ及ゞるの変てどざるまスヨ 家ナニ
誰ゞまゞ様みこと言て同せこ 塔ヱ誰ゞいろどもも自ヨ
ゞ 家ヨ 部屋 ナニハそこにおるをいろて見まスと そのおる
らんの女人お出の途中で雨の降さのゞ私の僥倖まりま
あこのごろう柳川さんの方ゞ緩ゞ先ゞでどざるまスハそれ
だろう 私ハおるヽヽして居てお帰さんまるで捨らと
さん仕ましけまゞ貝どざるまスヨ 家ナニノ 拾るるるる
ゞ相ろうゞ世話もしてハ来ねハナ 久ヽヽ来るのうろ

文「お茶の耳へ種々なことが聞えもして居るだらうが實は
姉娘ハお増を女房にと極めて置いたが當時の
訳で身分合の女郎買ぐるひをしたといつてくるしだ桑
情思ハ根人がいつヨトいつまでお増ハ涙を落して枕に俯き
泣て居る　宗「ヲヤ女郎買するハ誰がある此所へハ來ねへといふ
が悔しかりて泣のかエエまたサ　増「イイエ左様でハござゐま
せんヨお茶さんが内證に苦労してお家の中で松さんが郎
あて様んで活業て居てハ冥利が尽もするし第一お茶

さんが御本店の事や何かで彼是潛山苦労被成まする
節になりても少しハ松が気がついてでもお茶さんの手助になる
事でハ恩返しも出来ませんまでもお側を居通すまいなら
様になりてハ他の思ハくも悔しふござゐますからハ
お増が如何言ましても其由ハいつふといつの當時宗
次郎の本店相場でかかりて大きなる損毛し
世間の評もあしくなりて出店の宗次郎より多
分の金を本家へ入まするその外借金を引請て波方

ゑぼして家尻市の身よりも余かぶのつくることをすり世
けん
ちゑ人のうぶを意地づくの振よりて御川の新へ
通の金を費やし支まをくへ〳〵関るうち女の
狭き志ろより後々の用心家尻市弐深く思ふよ
対て安用として居まじきを慮〳〵ぐら漸く
とゝのゑよその言葉ありをこゝろ〳〵とあゝ〳〵
宗一郎ど内外のことをこゝろ〳〵関て信切ゑ〳〵人
さぞ苦労も仕さらうが福徳屋の身上に
ぶづきが見てさうをりて振子を巻ゑ〳〵ぶのうふ
差支も仕まひと思ふがそれとも支婦の情合を思ひて始
終のこゝろと外ことがあるべきて見る〳〵塔ヲヤ
嬉しい振たんがいつもの振よ肝癪をおこさるゝで左振仕
あやるをまことふ〳〵安心いたす
トおもひこゝろ婚人こゝろ家尻市の身の春を
いまゝ婦美川の関女とこゝろ川てさんぐ相愛の益に
こゝろぎ所存をこゝろけまゝ海義を好む癖ある

中あるよ壁よりうせあ婚を立机ある婦女とうせ
楽しうとせば一しれうんと義初するハまづ家若き
子宮のうるびけ第ハ柳川ふるくかうり又
一方ハ身よりいうし形第うまびまづあ婚の
ひつよちうけける
始ハアアレサ柳川さんとあるを遠のく宗だうア知るさんなれ
嫌よまたくいひものあるものう婚ハ実ふよまくまるる
うを幸ひよ不幸よあ生でハ不でござるまたる

第二十二章

渕ハ瀬と変るうるひとのひうら男ひがけるき縁不縁を家
遂うまぬ家うるび宮初うう結びであるべきめを修よるう
ぬが宮ちう嫌ひ一人が好よりう好る人が不ちのハ程うるび
ちもちがめの程よ憲こがまるハ異一けまと言ふ間よ又も
義ひよりまたうまぬ中と結ばる縁のあるを男ハ多くよ
男女の縁の善悪ハ他異で浮のうるるものう再流婚ハ
宮庭帝の事を案じて涙切よまうまがうを堪忍一て

鶴が岡なる和泉町へ遊女とりて出し所へ来る客の評判
よく勿ち中裏の指所とうぞへらを繁昌のうん方もみ
ものなり浮世ふりて柳川の
ものなり文次郎の妻八いつ
ものなり柳川もまた文次郎の妻八いつ
せつなる山瀬八一向宗次郎を切ふのもてなしけまば元来年本中も
長うつれば宗次郎もあきもふ親情のものなり郎四郎竟ふ
柳川を身請して国なる新乃人家をこらえ舞女一人を分て
垂ふ久しる様べ而とりて楽しむ男の心次郎ようとて

あやしけを殺しへ柳川もうつ娘の憂苦労をしきて我
理を捨てるごとく宗次郎ふ身を任せ本意あき人情とも
いべきこと同じ身分と言へる娘ふ勢ふ柳さん様ふ新
久ト裏口の障子をあけて顔をつ出し ヨヤ大そふ早く
化粧ふ出来ないさ人ふ所ぞ人ふ知ら ハイ五何ふ人も知ふ
ぐず今新八ハ先刺新しへを買物ふ参こうう例ようを
金程早ハヨ 左様久私も毎度ようう早く新こうう
新して様ぐふと男川て来ンぐ子 そまへハ大きふ苦労

さぞごろけまの仏事　おれび　家威て　行下まし　「ヲモ〜〜〜　ナニサ
拾べのを見ようけるのでハ　ものひが　実ふ　あ　ハ　友達み　頼う
ぢやアものひうトいひものごろ　よる　「サア　ひ　人　あるホンニ　友
達といへば　裏の　あ秋さんハ　何様〜〜　あ　「ア　明日　聞さ
ゲ子　何様〜ても　田舎の　分限の　方へ　参ると　サ　「ヲモ〜
ろひそものごね人　彰さんとやらの　ひ清ハ　聖　ものの人　「ア
何ホ　ろ　く　の　田舎の　方へ　金の　都合を　付よ　ひとりてそ　で
ひ　弟ふ　あ秋さんよ　小　参ん　ぞも　ものて　ひ　そものごけまども　西

親ゲ　邪見ごろうまものろ〜〜　そ　ふ　様　ものトサ
「ヲヤ　左様　久　若　そものごね人　あ秋さんの　仏中ハ　何様ごろ　ふ
浮世ふ　苦労の　ものハ　ものと　ひけまど　中　ふ　一旦　別と
男ひと　人の　ひ　様ゲ　知　ものひ　在家ゲ　知　ても　逢　ものひ　ろふ
苦労ハ　十人　ものても　一人　有ろ　ものごろ　「左様　ものひョ　経
関て　見ろを　参ふ　表　ふ　人の　別　て　居る　ものヤ　縁を
切ろ　ものひけまバ　ものろ　ものと　ひふ　中も　ものハ　「ア　ものて　左様
だゲ子　別　て　居ても　縁き人　あまバ　情人　逢　ものろと　ひふ　の人

まづ頼みがあるけまどとるゝ事を思ひ出してゝ涙を賜へ
ゝゝ　まことは私の祈る出家の身の上は千人と一人も
あるまじと思ふはずト膝へ ホロリと雫は萩ゝもあれ
あるやうは何とか〳〵義理ゆゑ　せゝ〳〵何を思ひ出して
祈る業障ごそ〳〵と涙をとゞめきれどの事がお前の
身ゝもあるゝね人具那とゝバあの通り好男でをさ〳〵ゝて
多支又乳が付り形してあるゝ何ゝも苦労はあり
そうもなひんぐゝ実正は長屋中であれ
ゝ

がゝて居ゝゝ私なんぞがお前の具那の祈る人の世話ふるる
のごとそれとゝハモウ〳〵何ゝも他見で
お着ゝゝが左様ごらうがゝまゝ私の身にゝて着ゝと
形して居るのが本業でもゝ　今にゝて着ゝを両方ふ
義理があり　自由ゝもゝが丈を身揚にあるがあ
思ひて居る人の心も知れぬとの祈ゝ大根を馬ふ分で
貴歩形ゝゝ　影道を通りゝが鼻唄を唄ふ
「今ふ何の祈りの知で居ゝゝ闇でゝん当先の脇

せ〜ヤとんご辻ごまぞ
思ひてもまのあ方がるのうへ
機へ　ナヲニ左程でもあひがるてことを考へ出して見ること
各〜ふ出〜へとこやたうあひこけが有ものざれへト他の浄瑠
璃に引當てあ〜ぐと せ〜お柳が知へ伊勢ものうどとこぶ
ねるあ

初編ふ記せ〜彼文次郎へ巻ふ角ニ浄瑠命のことのま
うち續き便りふ男へ母親も病死して勘當のことび

文の網も切れ文次郎ハ田舎の親類を伝ひに母の知
ることびとて頼母〜〜下總の小見川とりふ所へ行て久〜〜く
音信も絶て縁の切れこうるがごと〜さてお柳の身ハ支類
ともふ亡人とあり今ハ伯母せ引て母ともたのみる
ある夜ことびハけれど宗次郎ふ身を寄て一度廓を出さ
すれば又文次郎ともあ逢ふ限りあるべ〜ものふ伯母の美見ふ
あるべ一つ〜ハ勝くもあるぬ宗次郎ことびまぐ今の身と
ありーあり表ことども打寄文次郎のうを思ひ出ー善

悪よつきて父を痛めるあるもおきうを嘉ふ一ふ人

「そして生涯も知まへ有ひうう毎日紅白粉をつけて髪ぐ

ずを仕ずぐう父ハ居ふでも自ずと乳で居るハト前後れる新

の風情和合同志とてお勢ハ咎めず倶よ私ひを合ろ「ヲヤ

そまでぐハ先達私ハ人よ聞ふぐ新の本宅ふおをの時ろ3時

今のあつと文さんと母ぐ仏の張ろ成ぐをりふ咲ぐあるぐ其

後ずしも便ずハ自ひのう人たしう船中で怪我を成でハ自久

「ハくそまぐうを時をを限ふ自ろて仕自ろうを思ふよふる

を変もあを又千度逢つをとのふ人もあるうう宅ふ乳ふうて

自ろう自ひョトをるしのおろう表の方ふ人育して男ヘイおー出発

自ろるまー「お新さんのお宅ハ此方でぐるまろう「ハイ雑

人でぐるまハト中義居を明て良見合せ「ヲヤ安さん久

宅ふお祖ろしのねえ子お遠入り成ふよう此所ぶ和れまー子

ザア此方へおいんを自ろるふ浅も居ふせんョ安左振ろ一ッぷく

呑で乗りませう出発自ろるまート表裏をあー乳を

配を自ぐう宅ふ入ハ文次郎の友達うてお新も別て公

嬉くせしに人なり　「まことふ久しくお目かからぬ今
日は何様して此所を御通りなされけるぞや此所へ御立ち
安「なに則ち汐汲の所ぢゃ　今日は此頼まれさるゆゑ
あつてゐと何ぞ御用あり乳と見てとる御勢は如何ぞや
私やアまさに往て参るゾ　御新さんはいかゞとあとをうて歳
まうと裏口より出て汐くゝ後にて彼男は懐中より手紙
を出し　安「これは文さんが頼んでよこしまいらせる何と後日
御返事をいて参りて御呉る世人急てもモウ汐汲の様子中

成変とのの外でもあるまいが先月田舎へ帰りて来て居る
ものと直ぐ頼の外て宮ふ切りて居るのサト聞よりも
ハツト此柳が拍ドキ〳〵あるなぞ出しく「文さんが
田舎へ帰りて久喧ぢゃアあるまいか　安「はてどのして
喧をいのものろ者ろし文さんも左様云つて居るのが減よ
久しく便りもせずに来ることろ死んだと思りて居るさるぞ
らふ警何様のの奥ふ身りて居ようとも如何も場合へ
身りが強く言へしと変もあり之限りても義理が

ゴロ〳〵ゴロ〳〵何卒百両出してくれと難義のこなやいろを
言ひて居ると頼んでよこす　歳さのサ
トあるより文次郎の親父してあやまり度ごろ〳〵
相ごろり當時濱清町とのくる横来て仮住居
弥ゴロ〳〵して居るゆえ家内中を
閉せしめ書状を認めて立帰る
左様ならば安さん宅ゆゑ〳〵でト送りて出る門のもち
何時のゴロ〳〵宗次郎裏口より立入て火鉢の傍にある
反紙を見て早速ハッと思へば浪資を久兵衛に見て
ハット思へば外をあづり笑顔をつくりて
何時のゴロ〳〵あれ成ゴロさッぱり知らぬ〳〵ゴロ〳〵
ゴロ〳〵ゴロ〳〵情人のお長が来て　ハイサ男のもたれ人
時分に反紙をよこ〳〵ハトあづり〳〵手紙で
言ひまどさんがゆ尚生の気の毒さ良然と頼を赤くして
涙ぐむこと屋理なり
作者曰ものゝ御の所為を浮留理本の振や全巻

のお雛さまと同じ浮世をなりまた人情人のあるとも流れて流れ流れ後の身は素人とうぐべて論じ難しまるこ二仏あるものもあるべき便りとなる女の身ゝ八種くふうつゝ考るもやはりなぜる所あるとゝ言ふ婦人ゝ意思とも悔しきものハあらじと浮世ゝ人ゝ思ひてよろせるべし

春色英對暖語 巻之十一了

爲永門人 春曉 執筆

爲永門人 春江 校合